

A)一夜の発熱後の肝障害例

38°Cの発熱の翌日当院を受診し、肝障害を指摘された。発熱は治まり、主な肝炎マーカーなどは全て陰性で、他覚所見では特記事項はなかった。末梢血では、単核白血球の著名な増加をみとめた。EBウイルスマーカーは、VCA-IgG、VCA-IgM、EA IgGが陽性、EBNAは陰性であった。1か月後、VCA-IgMのさらなる抗体価の上昇をみとめ、EBNAは陰性を持続し、EBウイルス感染症（伝染性単核球症）と診断した。症状が一時的であり、リンパ節腫脹や咽頭症状もみられなかったことから、典型的なEBウイルス感染症の臨床症状ではなく、抗体の推移からEBウイルス感染と診断した。約2か月後、肝機能、末梢血所見ともに正常に復した。症状前、パートナーとの接触があった。